

## 当院における出血時間検査の調査

◎川田 智也<sup>1)</sup>、川口 由美<sup>1)</sup>、大下 里沙<sup>1)</sup>、十良澤 勝雄<sup>1)</sup>、佐藤 千秋<sup>1)</sup>  
昭和大学藤が丘病院 臨床病理検査室<sup>1)</sup>

【はじめに】出血時間は、耳朶や前腕に切創をつくり止血までの時間を測定することで、一次止血機能の全体を把握できるスクリーニング検査である。血小板数が正常で出血時間が延長する場合は血小板や毛細血管の機能異常が疑われる。当院では Duke 法より精度が高いとされる template-Ivy 法（以下 Ivy）にて検査を行っている。

【目的】当院の Ivy において、再現性の確認、血小板数、凝固検査および血小板機能検査との関連、術前検査としての必要性を調査した。

【対象】2018年10月から2021年9月までの期間に Ivy を行った117例（男性70名、女性47名）、年齢中央値68.0歳（6～85歳）を対象とした。肝臓手術前検査91例、出血傾向精査11例、その他15例であった。

【方法】①複数回測定した症例の再現性、②血小板数との関連、③Ivyの正常例と延長例において血小板数、凝固検査および血小板機能検査を比較、④肝臓術前症例において術中出血量、入院日数、血液生化学検査を比較調査した。

【結果】①再現性はCV2.1～29.7%であった。②血小板数

との相関は $y=0.03x+8.2$ 、 $r=-0.149$ で逆相関は認めなかった。③Ivyの正常例と延長例において、血小板数、凝固検査、血小板機能検査のいずれも有意な差を認めなかった。④肝臓術前検査においては、術中出血量、入院日数に有意な差を認めなかったが、ICG検査では延長例で15分値が有意に上昇していた（ $p<0.005$ ）。また血小板数は延長例で有意に低下していた（ $p<0.005$ ）。

【まとめ】再現性は症例により若干のばらつきを認めた。また血小板数が正常で Ivy が延長の症例の中で血小板機能検査が異常だった症例は17.7%であった。当院では術後の止血困難症例があったことから3年前より肝臓術前検査に Ivy を実施している。今回の調査では術中出血量、入院日数との関連は認めなかったが、出血時間は潜在的な血小板機能異常症などを発見できる可能性がある。術前の出血時間検査は不要という報告もあるが、当院の経験上今回の調査結果のみで一概に不要とはいえないと考えられる。

連絡先 045-974-6330